

# 『蜻蛉日記』論

——雨の役割とその変容の視点から——

水内友美

## 一 はじめに

本稿は、雨の描写の検証を通して、『蜻蛉日記』の表現の特徴について論じるものである。雨の描写は『蜻蛉日記』研究の対象として部分的に論じられることが多いが、本稿ではその箇所をすべて抽出して分布表にまとめ、体系的に読み解くことを試みた。雨の描写が担った役割とその巻ごとの変容を探っていく、延いてはその背景としてある道綱母の心情や、兼家に対する意識の変化を考察したい。

## 二 『蜻蛉日記』における雨分布表

本稿における『蜻蛉日記』の引用本文はすべて、川村裕子氏訳注『新版 蜻蛉日記Ⅰ（上巻・中巻）』及び『新版 蜻蛉日記Ⅱ（下巻）』角川ソフィア文庫（二〇〇三年）による。『蜻蛉日記』中の雨に関する語句とそれに伴う形容表現を原文表記のまま抽出し、月ごとと●、和歌中に見られたものは○で示した。そして、それらを上巻・中巻・下巻に分けてまとめたものを、順に表1・表2・表3とした。道綱母以外が詠んだ和歌中に見られる語句には、詠人の略記を付してある。表は旧暦で表し、一月・二月・三月を春、四月・五月・六

月を夏、七月・八月・九月を秋、十月・十一月・十二月を冬に分類するものとする。また表1に関しては、該当する雨の描写がなかった年も、全体を縮小し網掛けを施して掲出した。

本稿では、道綱母の兼家に対する心情変化と、それに伴う雨の役割の変容に焦点を当てるため、道綱母が愛宮に贈った長歌中の「ながめの五月雨」（九六九年六月）と、章段（一八四）～（二〇〇）にあたる、九七四年二月から七月に渡る遠度の養女求婚譚の雨描写を、この焦点から外れるだろうという考えのもと、表から除外した。しかし、九七四年五月の稲荷詣での記事に見られた雨描写は、養女求婚譚の期間中ではあるものの直接的な関係はなく、兼家との夫婦仲を神に祈る場面であるため、例外として表3に掲出した。また、九七一年十二月の和歌中に見られた「石上」は、「石上ふるとも雨に障らめや逢はむと妹に言ひてしものを」（古今六帖・第一・大伴像見・四四三）を引歌としたもので、雨に関する表現となっていたために表2に掲出した。道綱母が兼家に贈った長歌中の「初時雨」（九五八年七月頃）は、実際に詠み込まれた雨がいつ降ったものなのか明確ではないため、表から省いてある。これらの表をもとに考察を進めていく。<sup>(1)</sup>

表 1 【兼】→兼家 【宮】→章明親王

12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月	3月	2月	1月	
		○しぐれ 【兼】	●雨 ○しぐる 【兼】									954年
						●長雨いたう ○ながめ						955年
												956年
		○時雨 ●時雨といふばかりにも あらず、あやにくに										957年
												958年
												959年
												960年
												961年
						●雨いたう ○ながめ ○ながめ【宮】 ○あめ【宮】 ●雨間						962年
												963年
												964年
												965年
												966年
												967年
												968年

表2

12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	閏5月	5月	4月	3月	2月	1月	
								○五月雨 ●雨いたく					969年
●雨風 ●雨の脚 ●雨風 ●雨いといたう								●雨					970年
●雨 ●いみじき雨 ○石上 ●雨(いといたく)			○時雨 ●時雨	●雨いといたく	●雨 ●雨 ●雨 ●雨風いみじく	●雨 ●雨いたく ●雨(いたく)		●長雨			○雨の脚 ●雨 ●雨の脚いとのどか ●雨間 ●雨いたく		971年

表3

12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月	3月	閏2月	2月	1月	
		●時雨 ●時雨がち		●時雨だちたる ●雨			●雨		●雨のどかに	●雨 ●雨の脚いと心細し ●雨のどかなり	●雨のどやか ●雨 ●雨よいほどにのどやか ●雨いとのか		972年
							●雨もよに				●雨がち		973年
			●雨間 ●雨				●雨				●雨 ○あまぐも ●雨いふかたなけれ		974年

### 三 上巻の雨分布

上巻の雨描写は、中・下巻に比べると非常に少なく、そのほとんどが歌語として和歌に詠み込まれている。六月の梅雨時と九・十月の晩秋から初冬にかけての時期とに明確な分布の偏りがあり、それらは「雨」という抽象的な表現ではなく、「長雨」や「時雨」のように、より具体的な表現が多く用いられている。多少のずれはあるものの、歌材となる「長雨」や「時雨」の降りやすい時期にのみ現れる雨描写は、雨を歌材としてしか見ていなかった道綱母の視線で切り取られたものであるといえよう。

こうした特徴的な分布はすべて、歌反故などの素材をもとにして、九五四年から九六八年までの十五年間にも渡る膨大な記事を後から回想しまとめられたものであるという、上巻の成立背景の影響を強く受けている。また、兼家の新邸に迎えられなかったことを契機として執筆されたものであるため、儘ならない夫婦仲への苦悩を募らせていく道綱母の「今と比べれば昔はまだ幸せだった」という思いを少なからず反映し、まるで新婚時代の二人の恋物語を演出しているような「歌物語的性格」の強い巻になっていることも影響しているだろう。

#### 《1》【九五四年・九月】

つごもりがたに、しきりて二夜ばかり見えぬほど、文ばかりあ  
る返りごとに、

消えかへり露もまだ干ぬ袖の上に今朝は しぐるる 空もわ  
りなし

たちかへり、返りごと、

思ひやる心の空になりぬれば今朝は しぐるる と見ゆるなる  
らむ

とて、返りごと書きあへぬほどに見えたり。

また、ほど経て、見え怠るほど、雨 など降りたる日、「暮に來  
む」などやありけむ、

柏木の森の下草くれごとになほ頼めとや漏るを見る見る  
返りごとは、みづから来て紛らはしつ。

（上巻〔七〕二二―二三頁）

《1》には、「暮に來む」などやありけむ」という曖昧な表現が見られることから、歌反故などをもとに回想したものであることが分かる。和歌のやり取りの後には、それぞれ「返りごと書きあへぬほどに見えたり」「返りごとは、みづから来て紛らはしつ」という描写がある。兼家の訪問時にまだ雨が降っていたのか、すでにやんでいたのかは定かではないが、仮に後者だったとしても、雨上がりぬかるんだ道を牛車で通ってくることに普段以上の労力を費やしたに違いなく、そこに兼家の誠意が窺えよう。

さらに、六月の雨分布の偏りについてももう少し考察を加えたい。

先に「六月の梅雨時」と述べたが、厳密にいえば当時の六月は梅雨時ではない。現在では梅雨といえは六月が思い浮かぶものであるが、旧暦の六月は盛夏であつて、梅雨の真っ只中は五月に当たる。実際、上巻以外に六月の雨が見られるのは、九七一年の鳴滝籠りにおける三例のみである。本来ならば雨の降りにくい時期であつたはずの六月の雨が上巻の記事に偏っているのは、道綱母が季節の事象として

の長雨の観賞よりも、歌語長雨の情趣を分かち合った兼家との思い出に比重を置いていたからであると考察する。「今と比べれば昔はまだ幸せだった」と新婚時代を回想した時、例えば、長雨によって色褪せる下葉に我が身を重ねた独詠歌が、月を跨いで拾い上げられ贈答歌へと発展した様子や、二人で長雨に降り籠められながら、兵部卿宮章明親王との和歌のやり取りに興じる様子などと、今（上巻執筆時）とは違っていたのかの兼家の一挙一動に目を留めたのだと思うのである。そうした道綱母の意識が日記のエピソード選定に反映された結果、本来の梅雨時期である五月ではなく、兼家との印象的な思い出の多かった六月に長雨の描写が偏るという、一部時節に捕らわれない雨分布を生んだのだと考える。

自然の景物に自らの思いを仮託し贈り合った贈答歌、延いては兼家と心を通わせた新婚時代の思い出を数多く記すことが、当時の二人の仲睦まじさを匂わせることに繋がっていたのだろう。上巻の雨は二人の背景として、思い出を飾りたてるものであったと考えることができそうである。

#### 四 中巻の雨分布

中巻には、「いたし」だけではなく「いみじ」も用いるようになった激しい雨の描写が、九七一年に集中して見られる。下巻に頻出する「のどか」な春の雨も、九七一年が初出である。また、これまで描かれてこなかった冬の雨が中巻にのみ唯一記されており、九七〇年十二月、九七一年十二月の二例ともに過去の回想描写が見られる。

これまで使われてこなかった形容詞で、またはこれまで記されなかった季節に現れた雨の描写は、道綱母が新しいものに目を向け始

めた兆しである。そしてその新しいものとは、道綱母がこれまで目を背けてきた兼家の変貌に他ならない。九六九年秋から九七〇年春頃に完成した兼家の新邸に迎え入れられなかったことが決定打となり、長くライバル関係にあった時姫との正妻争いに敗れたこと、九七〇年七月に兼家の新しい愛人・近江の存在が発覚したこと、九七一年一月に結婚してから初めて兼家のいない元旦を迎えたことなどが重なり、ついには九七一年六月の鳴滝籠りに発展するほどに道綱母の心が激しく揺さぶられていたことが、中巻の雨分布に反映されている。

#### 《2》【九七〇年・十二月】

今日の昼つかたより、雨いというはらめきて、あはれにつれづれと降る。まして、「もしや」と思ふべきことも絶えにたり。「いにしへを思へば、わがためにしもあらじ、心の本性にやありけむ、雨風にも障らぬものと習はしたりしものを、今日思ひ出づれば、昔も心のゆるぶやうにもなかりしかば、わが心のおほけなきにこそありけれ、あはれ、さらぬものと見しものを、それさへ思ひかけられぬ」とながめ暮らさる。

雨の脚同じやうにて、火ともすほどにもなりぬ。南面にこのごろ来る人あり。足音すれば、「さにぞあなる。あはれ、をかしく来たるは」と沸きたぎる心をば、かたはらに置きてうち言へば、年ごろ見知りたる人、向かひゐて、「あはれ、これにまさりたる雨風にも、いにしへは、人の障りたまはざりしものを」と言ふにつけてぞ、うちこぼるる涙のあつくてかかるに、おぼゆるやう、

思ひせく胸の炎はつれなくて涙を沸かすものにざりける  
と、くり返し言はれしほどに、寝る所にもあらで、夜は明かし  
てけり。  
(中巻「九八」一六四―一六五頁)

時姫との正妻争いに敗れ、追い打ちをかけるように新しい愛人の存在が発覚しただけでなく、九七〇年十一月二十二日の夜、道綱を送り届けることなく一人で道綱母邸に帰した兼家の薄情な行動に、「以前のあの人ならこんなことは決してしなかった」と道綱母は大きなショックを受ける。立て続けに起こったこれらの出来事は、夫婦仲の回復という一縷の望みとともに、その源となっていた妻としての自信さえも粉々に打ち碎き、時姫や町の小路の女と張り合っていた頃とは何もかもが変わってしまったことを、彼女に思い知らせたのだろうと思う。その直後に記されたのが、《2》の回想描写を伴う冬の雨の初出記事である。刺すように冷たい冬の雨による辛さ、厳しさが道綱母の度重なる苦悩を助長し、ありし日の「雨風にも障らぬ」兼家の姿を想起させたのだろう。

そもそも、現代に比べ雨具の発達が未熟であり、雨に一度濡れると色が滲んだり落ちてしまったりするような草摺の衣服が多かったこと、主な移動手段が徒歩や牛車であった当時の実態を踏まえると、雨の日の外出が大変な困難を伴うものであったことは想像に難くない。そうした中で、雨を衝いて女のもとを訪れる男の行動は、誠意を示す愛情指標として位置付けられ、多くの場合雨の中男の来訪を待つ女側に焦点が当てられて恋愛譚を作り出し、古くから物語や和歌集に取り上げられてきた。<sup>3)</sup>道綱母が拘る「雨風に障らぬ」兼家像もこれに基づいたものであり、中巻において繰り返し回想される、

幸せだった頃の昔を象徴するイメージである。そしてその回想と結びつく記事として挙げられそうなのは《1》のみなのであるが、それについては平野美樹氏が、

雨という設定の持つ力によって描かれてはいない。兼家の言動は「雨に障る」ことを意識したものとはされず、道綱母の方も、訪問の有無と雨とを結びつけているわけではない。雨は歌の題材に生かされているが、兼家の訪問がその背景によって劇的に彩られたりはしないのである。<sup>4)</sup>

と述べているように、回想のイメージと合致しているとは言い難い。しかし本稿ではまず、当時「本当に愛しているのなら、天候に左右されずに毎日通って来て当然である」という価値観が前提としてあったと仮定して、《1》以前に雨風に障ることなく通って来ていた兼家については、道綱母がそれを当たり前だと捉えていたために、取り立てて記事にされることのなかった可能性を考えたい。男が雨に障って訪れなくなったとき、はじめて女はその嘆きを歌に込めて贈ったのではと推測する。そのため、歌反故などをもとにして成立した上巻においては、もともとなる歌自体がない以上、記事として現れようがなかったのではないだろうか。よって、日記中には現れずとも、中巻において彼女が回想する「雨風に障らぬ」兼家の思い出の中には、そうした日々も含まれていると考える。また、《1》の「返りごと書きあへぬほどに見えたり」「返りごととは、みづから来て紛らはしつ」と淡白に記された事実の中で、雨の降る中訪ねて来たことを喜ぶ道綱母と、誠実な愛を語る兼家との詳細なやり取りが省略されてしまった可能性も併わせて考えたい。町の小路の女の出現による苦悩や、兼家の新邸に迎えられなかった落胆を経験した執筆

時の道綱母には、当時確かに嬉しく感じていたはずの出来事が、素直に記せなくなっていたのではないかと思うのである。以上を、本稿における「雨風にも障らぬ」兼家像の一考察としたい。

### 《3》【九七一年・二月】

さはれ、よろづに、この世のことはあいなく思ふを、去年の春、呉竹植ゑむとて乞ひしを、このごろ「奉らむ」と言へば、「いさや、ありも遂ぐまじう思ひにたる世の中に、心なげなるわざをやしおかむ」と言へば、「いと心狭き御ことなり。行基菩薩はゆくすゑの人のためにこそ、実なる庭木は植ゑたまひけれ」など言ひおこせれば、「あはれにありし所とて、見む人も見よかし」と思ふに、涙こぼれて植ゑさす。

二日ばかりありて、雨いたく降り、東風はげしく吹きて、一筋二筋うち傾きたれば、「いかで直させむ、雨間もがな」と思ふまに、

なびくかな思はぬ方に呉竹のうきよの末はかくこそありけれ

今日は二十四日、雨の脚いとのかにて、あはれなり。夕づけて、いとめづらしき文あり。「いと恐ろしき気色に怖ぢてなむ、日ごろ経にける」などぞある。返りごとなし。

五日、なほ雨やまで、つれづれと、思はぬ山に、とかや言ふやうに、もののおぼゆるままに、尽きせぬものは涙なりけり。

降る雨の脚とも落つる涙かなこまかにものを思ひくだけば

(中巻【一〇二】【一〇三】一七〇—一七二頁)

九七一年の春、初めて兼家不在の元旦を迎えた道綱母は、雨風に煽られ倒れかけた呉竹に自身を重ね、いよいよ出家への思いを強める。その同月二十四日には、「のどか」と表現された春の雨が描かれるが、これは道綱母が一時的にある境地へと到達したことを表しているようである。あえて「のどか」に感じようと努め、意識的に兼家への執心を振り払おうとする境地である。

### 《4》【九七一年一月】

あらたまれども、といふなる日の気色、鶯の声などを聞くままに、涙の浮かぬ時なし。(中巻【一〇〇】一六九頁)

《4》に象徴されるように、穏やかな日差しや新たな季節の訪れを告げる鶯の声といったような春の情景は、苦悩に塗れた道綱母にとって、ふりゆく我が身を浮き彫りにするものでしかなかった。内野信子氏も、「兼家を執拗に追っていた道綱母には、「のどか」たるべき春の「雨」も、「のどか」と感受するゆとりはなかった<sup>5)</sup>」と指摘しているように、《3》の「雨の脚いとのかにて、あはれなり」とは、兼家の様々を諦めることで現状から脱却し、心安らかな春を獲得しようとする意志の表れであると考ええる。しかし翌日には、やまない雨にとめどなく流れる涙を重ね、尽きない物思いに心を碎いた日々を回顧せずにはいられなくなった様子が記される。先に「一時的に」と述べたのはこのためである。中巻にはこれ以降「のどかな雨は見られないが、鳴滝籠りを経て下巻の「のどかな雨群へと繋がついていく。

中巻の冬の雨は、ありし日の兼家の姿を引き出してその変貌を浮

き彫りにし、春の雨は諦念を滲ませながらもなお拭い切れぬ兼家への執心を際立たせることで、深まっていく嘆きを助長している。無意識のうちに心に留めてしまう激しい雨の情景には、近江の存在に脅かされる道綱母の不安定な心が少なからず影響しているのだろう。

## 五 下巻の雨分布

下巻では春の雨が急増し、その多くが「のどか」という形容詞を、いくつかは漢詩文表現を伴って描写され、日付と天候をセットにした日録性の高い雨描写も顕著になる。しかし、上・中巻と比べると歌語として和歌に詠み込まれるものはめっきり減り、九七四年二月に一例見られるのみとなる。

元旦の言忌でこぼした「三十日三十夜はわがもとに」という願いが始まり、激しく感情を高ぶらせた中巻とは対照的に、下巻冒頭では「今年は天下に憎き人ありとも、思ひ嘆かじ」という決意を固めて心を落ち着かせており、その志を遂げようとする姿勢が一貫して見られたことが、このような分布に繋がったのだろうと考えられる。

### 《5》【九七二年・二月】

明くれば二月にもなりぬめり。雨いとのだかに降るなり。格子など上げつれど、例のやうに心あわたしからぬは雨のするなめり。されど、とまるかたは思ひかけられず。

(中略)

やがてそこもとに、雨皮張りたる車さし寄せ、男ども、かるらかにて、もたげたれば、はひ乗りぬめり。下簾ひきつくるひて、中門より引き出でて、先よいほどに追はせてあるも、ねたげに

ぞ聞こゆる。

日ごろ、いと風はやしとて、南面の格子は上げぬを、今日、かうて見出だして、とばかりあれば、雨よいほどにのどやかに降りて、庭うち荒れたるさまにて、草は所々青みわたりにけり。あはれと見えたり。昼つかた、かへしうち吹きて、晴るる顔の空はしたれど、こちあやしうなやまして、暮れ果つるまでながめ暮らしつ。

(下巻(二四四)一六(一七頁))

《5》にある、「例のやうに心あわたしからぬは雨のするなめり。されど、とまるかたは思ひかけられず」という描写からは、望みをかければかけるほど、自らが苦しむ羽目になることに気付き、兼家に対して期待することをやめた道綱母の様子が見て取れる。それでも、中巻で激しく燃え盛った兼家への思いはそう簡単に消し去ることはできず、思いの火は彼女の胸のうちに燻り続けている。気を緩めれば甘い期待を抱いてしまいそうになる危うさを感じ、内心穏やかではない彼女は、「のどか」な雨を意識することで、必死で心の平静を保とうとしているように思えるのである。<sup>6)</sup>「たちきれぬ執着の裏返しとして『のどか』に装うこととなろう」と指摘する森藤侃子氏、「意識的に作者は穏やかな雨の描写を取ったと思われるのである」と指摘する宮田京子氏をはじめとする方々同様、これらは「のどか」に感じようとする単なるポーズに過ぎず、道綱母は胸の内の複雑な葛藤を表に出すまいと「のどか」な春の雨で包み隠そうとしているように思われる。

### 《6》【九七二年・閏二月】



閏二月のついたちの日、雨のどかなり。それより後、天晴れたり。

三日、方あきぬと思ふを、音なし。

四日もさて暮れぬるを、「あやし」と思ふ思ふ、寝て聞けば、夜中ばかりに、火の騒ぎする所あり。

(中略)

六七日、物忌と聞く。

八日、雨降る。夜は石の上の苔、苦しげに聞こえたり。

(下巻(二四九)三三三―三五頁)

《6》で用いられた「夜は石の上の苔、苦しげに聞こえたり」などのような漢詩文表現については、斎藤菜穂子氏の、

千載佳句は漢詩を二句ずつ抜き出すのだが蜻蛉日記当該部分ではみなその中の一句のみを引いて、対であるもう一句の内容を浮かび上がらせる表現にはどれもなっていない。漢詩文の取り込みは、引歌のような一部を表現に組み込むことで残りの部分を浮かび上がらせる表現方法ではないのであり、漢詩文の断片的な世界と共にその文体を取り入れることに、漢詩文表現の撰取の意味が見出されそうである。(中略)漢詩文の取り入れはみな兼家との関わりを描いた直後にあって、(中略)兼家との関わりから離れて春の季節感に沿う自然を叙述していて、兼家に意識が集中していく時間の流れを一旦切るものとなっている。<sup>8)</sup>

という指摘があり、日録性の高さについては、小山香織氏の次のような指摘がある。

記された日付の大半が、兼家の訪れを示す日付か、あるいはそれを待って数える日付であることに、改めて気付かされる。(中略)通ってくる夫の訪れをただひたすらに待ち、することとは空を、庭先をながめやるしかないという、まさに「平板」な王朝女性の日常を浮かび上がせたものであった。<sup>9)</sup>

下巻でもそれ以前と同様に、道綱母は兼家の来訪を指折り数えて待ち続けている。ただ一つ以前と違うのは、自らの言葉を紡ぎ、その焦がれる思いを形にしくなったことである。儘ならない夫婦仲、兼家への捨て切れぬ執心に散々心を乱された末に辿り着いた、「今年は天下に憎き人ありとも、思ひ嘆かじ」という決意は固い。「のどか」の多用や漢詩文表現の撰取は、道綱母の揺るぎない決意の表出に他ならない。

《7》【九七年・一月】

今日は二十三日、まだ格子はあげぬほどに、ある人起きはじめ、妻戸おし開けて、「雪こそ降りたりけれ」と言ふほどに、鶯の初声したれど、ことしも、まいてこちも老い過ぎて、例のかひなき独り言もおぼえざりけり。

(下巻(二四二―一四頁)

さらに吉本隆志氏は、兼家との夜離れをめぐる文のやり取りの後、《7》の記事が記されていることに注目し、

これを単純に作者が無感動な状態に至ったことを示す記事として読むことはできないだろう。むしろ、ともすれば鳴滝以前の煩悶と懊悩に立ち戻ろうとする自らの情動を鎮め、そうした内

面を押し隠そうとする作者の意識が働いていると考えるべきであらう。

と述べ、道綱母が意図する以上の強さで煩悶や懊悩を形象化してしまふことを危惧して、自らの心境を日記中に表現する手段としては和歌を不適切だと判断したことが、「かひなき独り言」という言葉に表れているのだろうと結論付けている。

以上から、下巻で和歌が詠まれなくなっていたことも同様に、「今年は天下に憎き人ありとも、思ひ嘆かじ」という道綱母の固い決意を表しているのだろうと考えられる。九七二年の春の雨群に関するは、これまでも数多くの研究が進められてきた部分であったが、体系的な雨分布の観点から見ても、兼家への執心を制圧しようとする道綱母の意識が働いていたことを裏付ける結果となった。

#### 《8》【九七二年・五月】

六日のつとめてより雨はじまりて、三四日降る。「川水まさりて、人流る」と言ふ。それも、よろづをながめ思ふに、いと言ふ限りにもあらねど、今は面馴れにたるもなどは、いかにもいかにも思はぬに、

(下巻(二五八)四八頁)

#### 《9》【九七三年・二月】

ついたちより雨がちになりたれば、いとどなげきの芽をもやす、とのみなむありける。

(下巻(一六九)六一頁)

#### 《10》【九七四年・九月】

八月二十余日より降りそめにし雨、この月もやまず降り暗が

りて、この中川も大川も、一つに行きあひぬべく見ゆれば、「今や流るる」とさへおぼゆ。世のちいとあはれなり。

(下巻(二〇二)一一二頁)

また、特徴的な九七二年の春の雨群以降は、上巻に良く似た分布となっていることにも注目したい。兼家への執心にひとまずの区切りをつけた道綱母は心の平静を取り戻したことによって、雨は暦通りの降りやすい時期にしか目に留まらぬ、単なる背景へと回歸する。しかし、物思いに沈む道綱母の背景に、「六日のつとめてより雨はじまりて、三四日降る」「ついたちより雨がちになりたれば」「八月二十余日より降りそめにし雨、この月もやまず降り暗がりて」などというような描写が目立つようになることから、今度は降り続ける雨の描写が「のどか」な春の雨群に代わり、兼家に対する執念と諦念との間で揺れる道綱母によって、その複雑な心境を託されたものであったと考えることはできないだろう。

#### 六 おわりに

上巻では雨描写自体が少なく、そのほとんどが歌語として和歌に詠み込まれている。特に六月と九・十月には贈答歌の身近な題材となり得た長雨や時雨が顕著である。しかし逆にいえば、そうした際立った時期以外にはまだ道綱母の目に留まらぬものだったのであり、基本的には歌語として、またはそれを導く詞書的なものとして新婚時代の二人の心の交流を彩るもので、それ以上でも以下でもなかった。本来ならば雨の降りにくい時期であったはずの六月に分布が偏ったのも、二人の印象的な思い出が優先的に記されたためである

と思われる。

中巻では、激しい雨の描写に「いたし」だけではなく「いみじ」を用いるようになったことから、雨に対する描写意識の深化が窺える。また、これまで記されなかった回想描写を伴う冬の雨や「のどか」な春の雨を記す記事も出現した。冬の雨は、道綱母が弱気になっっている時に表れる。秋の寂しさを喚起する雨とはまた違う、冬の辛く厳しい雨が傷心に沁みただのらう。中巻では、新しい愛人の存在や正妻争いの敗北に激しく動揺したために、かつての甘やかな記憶に拠りどころを求め、回想描写を伴った冬の雨が目に留まったのらうと考えられる。暖かい春の雨特有の穏やかな情趣は道綱母にとって縁遠いものであったが、あえて「のどか」に感じようとすることで、「もう兼家の言動に心を乱さない」というポーズを示そうとしたのらうと思われる。冬の雨や春の雨の出現からは、幸せだった過去と現状とを照らし合わせてその変貌を認め、兼家への執心を振り払おうとする道綱母の様子が窺える。雨に対する描写意識の深化も、そうした心情変化によってこれまで兼家だけに向いていた意識が周囲へ分散されたために起こったのだと考察する。中巻の雨は、道綱母のおぼつかない我が身への嘆きを集約、助長するものであったようである。

執拗に「のどか」という言葉を用い、時には漢詩文表現を組み込んで記される下巻の春の雨は、兼家への心情表出を遮ることで「今年は天下に憎き人ありとも、思ひ嘆かじ」という下巻冒頭の決意の固さを強調している。しかし、九七二年の春以降「のどか」な春の雨は一切記されていないことから、道綱母の心からの表現ではなかったことは明白である。道綱母にとって「のどか」な春の雨は、

本心を覆い隠す柔らかな繭であった。内心は穏やかでなくとも「のどか」な雨に感じようと心掛け、これまでのように兼家への愛憎にのまれることを拒んだのである。同様に、和歌を詠まなくなっていたことも、自身の心情表出を遮る一手段であったといえよう。その甲斐あつてか、上・中巻では兼家への思いと絡め、「涙」や「老い」を引き出すものとして表れていた時雨が、下巻では紅葉した山を美しく見せるものとしても記されている。

『蜻蛉日記』において描かれた雨は、上巻では背景として思い出を飾りたて、中巻では深まっていく嘆きを引き出し、下巻では逆にその嘆きを封じ込める役割を担っていた。無意識に目を留めて書き記した雨の描写の中に、彼女の抱え続けた晴れることのない苦悩が垣間見え、その苦悩から脱却しようとする意識の変遷を辿ることができるのである。

#### 注

(1) 本稿では、引用本文中の雨に関する語句は四角で囲み、それに伴う形容表現には太い傍線を引いてある。末尾には巻名・掲載章段・頁数を記載した。また、それぞれの巻の執筆時期も川村裕子氏に倣い、上巻は九六九年秋から九七〇年春（兼家の新邸に迎えられなかったことを契機とする）、中巻は九七一年の鳴滝籠りの後、下巻は九七三年の広幡中川転居後という想定のもと考察した。

- (2) 大隈博子「平安朝文学における雨」『香椎湯』一三（一九六七年八月）
- (3) 平野美樹「雨風にも障らぬもの」考『蜻蛉日記』中巻の表現形成『中古文学』（一九九五年）

- (4) (3)と同じ
- (5) 内野信子「蜻蛉日記」における「雨」「のどか」をめぐって―天禄三

年春の「雨」に見る道綱母の心情の安定―『日記文学研究誌』五（二〇〇三年三月）

(6) 森藤侃子「蜻蛉日記中巻から下巻へ―「自然」の叙述を中心に―」『人文学報（東京都立大学）』（一九八七年）

(7) 宮田恵子「『かげろふ日記』下巻の性格―天禄三年の日録的記事の検討から―」『日本文学研究（梅光女学院大学）』（一九九〇年）

(8) 斎藤菜穂子「蜻蛉日記下巻における漢文的表现―兼家との関係の相対化へ―」『国文学研究』一三七（二〇〇二年六月）

(9) 小山香織「『蜻蛉日記』下巻冒頭部の表現―漢詩文引用による自然叙述と日録性―」『中古文学』七二（二〇〇三年十一月）

(10) 吉本隆志「『かひなきひとり言』考―蜻蛉日記後半の独泳と自然観照をめぐる試論―」『上智大学国文学論集』二二（一九八八年一月）

## 受贈雑誌（四）

国文学論叢

龍谷大学国文学会

国文稿

京都橘大学日本語日本文学会

国文鶴見

鶴見大学日本文学会

国文論叢

神戸大学文学部国語国文学会

国文論藻

京都女子大学国文学会

古代研究

早稲田古代研究会

語文

日本大学国文学会

語文研究

九州大学国語国文学会

語文と教育

鳴門教育大学国語教育学会

語文論叢

千葉大学文学部日本文化学会

駒沢国文

駒沢大学文学部国文学研究室

佐賀大國文

佐賀大学教育学部国語国文学会

相模国文

相模女子大学国文研究会

JOL神戸松蔭女子学院大学研究紀要

神戸松蔭女子学院大学国文学研究室

実践国文学

実践国文学会

実践国文学

実践国文学会

ス道文庫論集

慶應義塾大学附属研究所ス道文庫

上越教育大学国語研究

上越教育大学国語教育学会

上智大学国文学科紀要

上智大学文学部国文学科

上智大学国文学論集

上智大学国文学会